

安達氏における史実と物語

— 真名本『曾我物語』を中心として —

山西 泰生

〔抄録〕

文学作品が誕生するとき、そこに作り手の思想、所属組織（集団・階層）、時代の社会状況といった大きな「背景」が存在し、それらを作品内容と完全に切り離すことは不可能であろう。むしろ「背景」から作品が発生したほうが適切であろうか。これは文字が氾濫し、個人でも作品を生成できる現代と違い、限られた場所・階層でしか作品を創造することができなかった中世であれば尚更であると考ええる。

鎌倉幕府御家人の安達氏は「秋田城介」に任官したことから

「城氏」でもあった。鎌倉末期を編纂期と想定する真名本『曾我物語』は「安達氏」ではなく「城氏」として扱う。そして、それは歴史という観点からは矛盾を生じているのである。この矛盾には、真名本作者が生きた時代の社会情勢を背景とし、そこに根差した安達氏に対する作者の強い関心がうかがわれるのである。

キーワード 真名本『曾我物語』、藤九郎盛長、「城氏」、

〔頼朝説話〕

はじめに

日本における著名な仇討ちは、一般的に曾我兄弟・赤穂浪士・荒木又右衛門の三事例が挙げられる。

この中でも曾我兄弟の仇討ちは、「曾我物」と呼ばれる芸能作品群を生み出し、能・幸若舞・浄瑠璃・歌舞伎等といった中・近世芸能の

題材として盛況を誇る。宝永期頃からは、江戸の歌舞伎界では初春興行に、「曾我物」を上演することが恒例となった。兄弟の仇討ちが中・近世の人々に強い印象を与えていたものと言える。「曾我物」の芸能作品群の源流を成すものが『曾我物語』である。

作品の内容は、所領争いに端を発した一族内の抗争により、父親である河津助通（人名表記は原則として真名本に従うが、支障がない場合は

通称による。)を、後に頼朝近臣となる工藤一鷹助経に暗殺された曾我十郎助成と五郎時宗が十八年の雌伏の時を経て、助経を富士野の狩場において討取り本懐を遂げる。しかしながら頼朝に敵対した者、「反体制者」として兄弟ともにその場で最期を遂げるというものである。

この仇討ちは鎌倉時代初期の出来事であり、これを伝える『曾我物語』はその記される時代および武士である兄弟との関わりから、鎌倉幕府草創期の多くの武士団の姿を描いている。本稿ではその中の一員である安達氏の真名本における描かれ方を見、真名本と安達氏との関係性についての考察を行いたい。

安達氏の場合、源頼朝の側近である藤九郎盛長以前の出自については諸説あり判然としない。しかしながら頼朝が幕府を開設するに至って、その流人時代からの従者ということもあり、幕府中枢部の一員となる。この後北条氏と姻戚関係を結ぶことによりその勢力は拡張され、梶原・畠山・和田・三浦といった幕府草創期の功臣が滅亡していく中、泰盛の時代には北条氏に比肩しうる御家人の代表格と目されるようになる。そしてこの勢威が仇となり、弘安八年(一二八五)の霜月騒動で一時的にその勢力を失うことになるが、幕府末期には再び北条得宗家の外戚として復権を果たす。

この安達氏にはある特徴がある。それは盛長の子息の景盛から「秋田城介」を世襲したことに伴い「城氏」を名乗ることである。この景盛の秋田城介任官は『吾妻鏡』で確認ができる。ところが真名本『曾我物語』には盛長を秋田城介に任じ、「城殿」とするという記述が見られ、これは明らかに史実とは異なる点と言える。

よって本稿では真名本『曾我物語』における安達氏、特に藤九郎盛長の描かれ方から作者(ここでの作者は物語を最終的にまとめた編集者の意)と安達氏の関係を検討し、これに伴う安達氏の「城氏」表記の観点から、史実性を持たないその記述の特異性の理由、作者の意図についての考察を行いたい。

一 真名本と安達氏

『曾我物語』は真名本系・訓読本系・仮名本系に大別されるが、本稿では主として真名本を使用する。真名本の成立年代、作者に関しては諸先学が精緻な検討を重ねられているが、いまだに確定されるに至っていない。しかしながら、おおまかに捉えてその成立年代は、鎌倉時代末期が目安とされる⁽¹⁾。また、物語の生成の源流は御霊信仰⁽²⁾であり、これがさらに箱根権現や伊豆権現を中心とした東国の宗教環境の中で生成されていったと考えられている⁽³⁾。

真名本『曾我物語』と安達氏の関係性についてはすでに山西明氏の研究がある⁽³⁾。氏は真名本において安達盛長に対して称揚が見られる点を挙げ、この称揚の態度は安達氏に好意を持つ語り手によるものとし、安達氏の上野国支配権の關係から、語り手を上野国の神人団とされる。またこれにより、安達氏を「城殿」と表記するのは語り手と安達氏が密接な間柄にあった時期とし、成立年代を安達氏が上野国の支配権を所有していた霜月騒動以前、とするなど成立年代にも言及されている。

この山西氏の指摘に対して福田晃氏は、この成立年代に関する論は、

真名本『曾我物語』の語り手を上野国の神人団とするところに問題点があるとされている。すなわち上野国の神人団という存在が確認されないとき、氏の論は妥当性を欠くものとされるのである。⁽⁴⁾

このように真名本の安達氏に関する記述の箇所には、判然としない成立年代を推定させる場面もあることから、その記述内容は重要なものと思われる。しかしながら管見の限りでは、安達氏そのものと真名本の関係性についての論究は極めて少ないように思われる。

二 真名本における藤九郎盛長

(1) 藤九郎盛長の描かれ方

真名本に登場する安達氏は藤九郎盛長と子息の景盛であり、物語の扱う時代から主に登場するのは盛長である。ここで描かれる盛長は流人頼朝の側近としてであり、頼朝の幕府開設以降はその行動はほとんど見られず、したがって物語中において曾我兄弟と直接関わることは無い。これは同じ有力御家人の畠山氏、和田氏が兄弟の庇護者として描かれる点などとは異なっている。つまりは盛長は物語中において、曾我兄弟との関係性という点に限定して見たとき、それほど重要な役割は担っていないと言える。しかしながら、これを反対側からの視点で見たとき、ある特定の場面において真名本作者の安達氏に対する関心がかがえるのである。しばらく作品中における盛長の登場場面を見ていく。

頼朝は伊豆逼塞中に曾我兄弟の祖父である伊藤助親の三女と契り、

千鶴御前という若君が誕生する。この若君誕生を頼朝はおおいに喜び、

○真名本『曾我物語』(巻第二92頁)⁽⁵⁾

「(略)かの少き者十三にだにもならば元服させて、十五にだにもならば先に立てつつ、伊藤・北条を相具して、盛長・盛綱を使として東八ヶ国を打廻りつつ秩父・足利・三浦・鎌倉・新田・大胡・千葉・河越・江戸・笠井・小山・宇津宮・相馬・佐貫の人共に歎き合せむに、叶はずは奥州平泉の館の権太郎秀衡を憑みて、頼朝が果報の程をも為さばや」と語る。

この場面の盛長は伊藤、北条の次位と認識される対象であり、頼朝挙兵時には東国武士団への軍勢催促の使者、という極めて重要な役割を頼朝から期待されている。これは後年頼朝が挙兵した際、現実の事となる。⁽⁷⁾

こうして誕生した若君であったが、助親は平氏の咎めを恐れ若君を殺害してしまう。さらには頼朝の復讐を恐れ、討手を出す。これを耳にした頼朝は郎従に善後の策を授けるが、この場面において、

○真名本『曾我物語』(巻第二102頁)

佐殿、盛長・盛綱とて、朝夕御身を離れざる侍二人あり。

とされ、ここで盛長は盛綱と並び頼朝側近の筆頭格として描かれている。

この後助親の討手から逃れた頼朝は北条時政の許に落ち延びるが、この場面で盛長は、

○真名本『曾我物語』(巻第二107頁)

その後、伊藤の御所に留まりたりける藤九郎盛長以下の留守の人々も、御跡に連きて追々に皆北条の御所へ参りけり。と記される。

落ち延びた頼朝は、北条の許に身を潜める間に時政の娘の政子と契るが、時政の意向で政子は伊豆国目代の山木兼隆に嫁がされそうになる。しかしながら政子はこれを拒絶し伊豆山に逃げ込む。政子はここから北条にいる頼朝へ文を出し、頼朝も伊豆山へと向かう。ここまでは、

○真名本『曾我物語』(巻第三146頁)

藤九郎盛長以下の侍共も、追ひ追ひに一人も残らず皆伊豆の御山へ参りけり。

と記される。

この後頼朝夫妻は伊豆山権現に祈請を行い、権現からの示現を受け歎喜する。ここでも、

○真名本『曾我物語』(巻第三154頁)

藤九郎盛長以下の侍共も、随喜の涙に咽び兼ねてぞ泣き居たる。とされている。

また、同じく頼朝が伊豆山にあるとき、懷島平権守景義(大庭景義)が訪ねてくるが、

○真名本『曾我物語』(巻第三155頁)

朝夕格勤にて御前を去らぬ藤九郎盛長といふ侍と(略)。と記される。

以上見てきたように、多くの場面において藤九郎盛長は「藤九郎盛長以下」と記され、常に頼朝の傍らに存在する郎従の筆頭格として描かれている。⁽³⁾ このことは真名本の作者が、盛長が頼朝郎従の筆頭格であるという認識を持っていたものと考えられる。また物語編纂時に、作者がこのような認識を持つに至る、当時の歴史的基盤・背景も存在し、影響を与えたと思われる。

(2)「頼朝説話」の中の藤九郎盛長

前述してきたように真名本の中において盛長という存在は、流人頼朝とその郎従筆頭という関係で存在しているものと言える。言い換えれば盛長は「頼朝説話」の中に存在しているのである。この「頼朝説話」は「延慶本平家物語」、「源平闘諍録」、「源平盛衰記」(以下それぞれ「延慶本」・「闘諍録」・「盛衰記」と記す。⁽⁹⁾)等にも見られ、当然そこにも盛長は登場するが、基本的に諸本に記される盛長に関連する記事内容に大きな違いは見られない。⁽¹¹⁾

以上のことを考慮した場合、真名本『曾我物語』における盛長像というものは、真名本作者の独自のものではなく、すでに存在した「頼朝説話」を取り入れた可能性も考えられるのである。すなわち仮に真名本作者が既存の「頼朝説話」を取り入れていた場合、真名本の盛長の行動に、真名本作者が描く独自性を見出すことは難しいものとなる。

しかしながら、真名本『曾我物語』と「延慶本」、「闘諍録」、「盛衰記」の中での「頼朝説話」において、盛長像に大きな異同がないこと

に関しては、真名本作者が「頼朝説話」を取り入れる際に、盛長像を改変させる必要性がなかったためとも言えよう。つまりは前述したように、物語編纂時には藤九郎盛長は頼朝郎従の筆頭格であったと認識される状況があったと推察される。

このように盛長は、真名本の中においてその登場の多くを「頼朝説話」の中に占めるが、頼朝の幕府開設以降はほとんど作品中に登場せず、曾我兄弟と直接関わることもない。ところがこの盛長について、詳細に記述する場面が出現する。その場面こそ真名本『曾我物語』作者と、安達氏の関係性を示教するものと言えよう。これについては次章で述べる。

三 「夢の引出物」に見る盛長の記述とその史実性

(1) 真名本における盛長への夢の引出物

○真名本『曾我物語』（巻第四201頁）

そもそも、鎌倉殿御世に出で御在しければ、夢の引出物とて、盛長をば上野の国の惣追捕使になして、出羽の国を賜ひつつ、秋田城介になされて今の世には、城殿と申す。

これは巻第四の冒頭部であり、頼朝が日本国を平定し盛長に恩賞を与える場面である。盛長は頼朝が伊豆山に潜んでいたとき、いわゆる「霊夢」を見、物語は頼朝の前途の吉兆を示唆するのである。これはその後日譚である⁽¹²⁾。

この場面の記述の要点は、

①盛長を上野国惣追捕使（真名本は「補」を用いるが、史料引用部分以外は「捕」を使用する。）に補任する。

②盛長に出羽国を与え、秋田城介とする。

③現在盛長（安達氏）は城殿と称されている。
である。

次に「聞諍録」が記す同場面を挙げる。

○「聞諍録」（巻下131頁）

兵衛佐、盛長を見て言ひけるは、「謀反を發し世に在らんと欲ひしも、詮ずる所、定綱・盛長が恩に報はんが為なり。然るに先づ昔の汝が夢物語の纏頭には、上野国の惣追捕使を給ふ。……

〈略〉」

このように「聞諍録」は、真名本①の「上野国惣追捕使補任」は記すが、②、③は見られない。

第二章で述べたが、この褒賞場面を「頼朝説話」に包含される部分と仮定した場合、この「聞諍録」の記述は真名本の素材になったものと考えられる。つまり真名本の「そもそも、鎌倉殿御世に出で御在しければ……」の場面における盛長の「上野国惣追捕使補任」は、「聞諍録」の「頼朝説話」を取り入れたものとも言える。一方で、惣追捕使補任以外の記事、「秋田城介任官」とこれに伴う「城殿」呼称の部分は「聞諍録」には見られないため、真名本独自のものと考えられる。これは安達氏の「現在」に関心を示す、真名本作者の意思と見ることができないのではないだろうか。

本節では盛長への褒賞場面での記述内容の要点が、史実に基づくも

のかどうかを検証し、そこから真名本作者と安達氏の関係について考えてみたい。

まず真名本、『闘諍録』の両方に共通する①から見てみる。惣追捕使とは諸国の治安維持のために置かれた役職で、建久年間頃にいわゆる「守護」という名に統一されたとされる。この盛長の上野国の惣追捕使補任という点については、佐藤進一氏が詳細な考証をされている。⁽¹³⁾

佐藤氏は建久元年(一一九〇)頃の上野守護を比企能員に比定される一方、『吾妻鏡』にそれより以前の元暦(一一八四)頃、盛長が上野国奉行人として見えることを指摘され、比企氏の守護職と盛長の国奉行人という役職は、別個のものとしてされている。そしてこの後、承元(一二〇七)頃に安達氏が上野守護になったとされるのである。一方、義江彰夫氏は「奉行人」と「守護人」の実体が同一である可能性を指摘され、「少なくとも兼帯していた可能性は認めねばならない」とされる。⁽¹⁴⁾

この「惣追捕使」・「国奉行」・「守護」の判別を明確にすることは困難であるが、ここで問題なのは、真名本作者が「惣追捕使」をどちらの意で使用していたかである。作品中でいわゆる守護職を意味するものと思われる表現としては、「惣追捕使」と「守護」の併記が見られ、⁽¹⁵⁾「国奉行」は見られない。これに関しては作者の認識が問題となるが、残念ながら作者が「惣追捕使」と「守護」を併用した意図・理由は不分明であると言わざるをえない。

以上のことから①に関する史実性を判じるのは極めて困難となる。「惣追捕使」が「守護」の意である場合、盛長は正治二年(一二〇〇)

に死亡したとされるため、⁽¹⁶⁾承元頃に安達氏上野国守護就任を推測される佐藤氏の説にしたがえば、「惣追捕使」は盛長の代ではなく、史実性を欠くと言える。一方で「惣追捕使」が「守護」に限定されるものではない時、義江氏の論により、盛長の代での「惣追捕使」就任も不自然ではなく、史実性を欠くものではない。

物語中で作者が、どのような認識で「惣追捕使」と「守護」を使い分けているかを明確に読み取ることは不可能である。よって本稿では真名本の「上野国惣追捕使」は、「盛長が上野国の行政に携わった人物」という認識のもと作者が使用したものと想定しておきたい。

次に②を見てみる。この「出羽国を与え、秋田城介とする。」という記述が盛長に該当するものでないことは明らかである。⁽¹⁷⁾『吾妻鏡』建保六年(一二一八)三月十六日条によれば、安達氏が秋田城介に任じられたのは盛長の子の景盛からである。

最後に③を見てみる。これは②に関連することでもある。「城」は秋田城介に任命された家が名乗っており、『吾妻鏡』での景盛は秋田城介任官以前は「安達」の表記が見られるものの、任官以降は「安達」の姓で記載されることはなく、「秋田城介」・「城介」で記されている。さらに景盛の子、義景になると初出記事から「城太郎」とされ、その後は「秋田城介」・「城介」と記されるようになる。⁽¹⁸⁾

このように、「城」の表記は秋田城介に任官されなければ使用されないで「今の世には城殿と申す」の部分も盛長を示すものではなく、編纂時の「安達氏」と言える。

また、この夢の引出物の場面とは異なるが、③に関係して盛長が

「城介」を名乗る場面がある。曾我兄弟は富士野において討ち入りを
行う直前に、兄の十郎が弟の五郎に頼朝の本陣を中心とした御家人達
の館の配置を語る。ここで西門の内陣右側の列に「城介盛長」の名前
が記される。⁽¹⁹⁾前述のとおり安達氏が盛長の代に「秋田城介」に任命さ
れた事実はないが、盛長を「城介」として記している。

真名本において盛長が「秋田城介」に任官した後、登場するのはこ
このみであるが、この場面は「頼朝説話」に包含される部分ではない
と考えられる。ここで盛長に「藤九郎」ではなく「城介」を冠してい
ることは、作者が物語の時間の中で盛長の「秋田城介」任官を、「そ
うあつて然るべきこと」として把握していたと言える。作者は盛長を
作品中のただの一人物としてではなく、「個」を持つ人物とする認識
を持っていたのではないだろうか。

以上見てきたように、この「そもそも、鎌倉殿御世に出で御在しけ
れば・・・」に見られる安達氏の記述に関して、①はその記すところ
の史実性については明確にできない。史実とも、そうでないとも言え
るのである。しかしながら②、③は明らかに史実的には妥当性を欠く
記述と言える。

つまり真名本『曾我物語』独自の記事と考えられる②、③に関して、
作者は史実性には欠けるものの、「現在」の安達氏の置かれている環
境を盛長への褒賞の場面を通して描き、盛長に付託して記述してい
ると言える。ここに安達氏の「現在」の状況を記そうとする真名本作者
の意思、安達氏への関心がうかがえるのである。

(2) 夢の引出物における大庭景義の記述

次に、盛長と同じく夢物語に関連して恩賞を賜った大庭景義に関す
る記述について考察していく。景義は伊豆山で盛長の夢を占い、頼朝
の向後の吉兆を祝している。

以下に夢の引出物の褒賞場面の景義に関する真名本『曾我物語』と
『關靜録』の記述を挙げる。

○真名本『曾我物語』（巻第四201頁）

〈略〉夢合わせ申したりし景義は若宮の俗別当になされて神人の
惣官を賜る。その上に大庭の厨屋は先祖の本領なりけれども、
代々の時、太多に分たれたりしを今度束ねてこれを賜る。その外
なほ庄苑田畠太多賜る上に、牧の数だにも五、六所これを賜る。
随分との稠者にて朝恩に誇りけるこそ咄けれ。

○『關靜録』（巻下130頁）

〈略〉景能が夢合わせの纏頭には、若宮の俗別当・鶴が岡の神人
の惣官並びに大庭の御厨を給ふ〈略〉。

この場面での景義への恩賞の記述は、「若宮の俗別当」、「鶴が岡の
神人の惣官」、「大庭の御厨」で異同はない。その一方で真名本に「そ
の上に・・・」以下の記述があり、真名本における盛長の記事同様に
詳細に記されているとも言える。しかしながら、真名本においてその
他の恩賞とされる「庄苑田畠」や「五、六所の牧」については具体的
には記されておらず、総体的に見れば真名本と『關靜録』における大
庭氏に関する内容の記述に大きな差異はない。また、「現在」の大庭
氏の状況を示す記述が無いことから、この同じ場面に描かれる安達氏

と大庭氏を比較した時、真名本作者は景義（大庭氏）の記述よりも盛長（安達氏）に關しての記述に比重を置いていたと言えるのではないだろうか。

(3) 盛長の「夢見」の意義について

この靈夢譚について福田晃氏は「盛長が頼朝に従つて伊豆山に隠れていたという可能性はあるにしても、そこに景義が参じて夢占いをしたなどという説話部分はやはりそのままでは信じがたいものである。」とされ、史実性は疑問視されている。そしてこの場面での景義の登場について、『吾妻鏡』でも景義が鶴岡八幡宮の官寺執行を命じられていることや、また鶴岡八幡宮と伊豆山僧侶との緊密な關係を挙げて、鶴岡八幡宮を通しての景義と伊豆山の緊密な關係を指摘される。そして、この靈夢譚の生成に伊豆山僧侶の参与を想定し、「景義と親密な間柄にあつた走湯山僧侶たちの創作力であつたと思われるのである。」とされる。⁽²⁰⁾

筆者は、福田氏の景義と真名本『曾我物語』の作者に關する指摘が、盛長にも通用する可能性があるのではないかと考えている。つまり盛長が靈夢を見ることには、何らかの必然性があつたと考えるのである。

この靈夢譚は内容の詳細部分に異同はあるものの、真名本『曾我物語』・『延慶本』・『盛衰記』・『關靜録』のそれぞれにおいて、盛長が夢を見、それを景義が占うという構図に異同はない。したがって福田氏がこの靈夢譚の場面で、景義が登場することに作者との關連を想定されるのと同じく、この場面で靈夢を見る盛長にも伊豆山僧侶と

の關係性が推測される。⁽²¹⁾ ここで諸本での盛長の夢に現れる登場人物を整理してみる。

○真名本『曾我物語』 伊保坊・実近・盛綱・盛長

○『延慶本』 伊法々師・盛綱・盛長

○『盛衰記』 伊法法師・盛綱・盛長

○『關靜録』 一品坊昌寛・定綱・盛長

右のように盛長の夢に現れる人物は、伊法法師（『關靜録』の一品坊昌寛は伊法法師と同一とされる）は諸本とも同じであり、盛綱（『關靜録』のみ定綱）、そして真名本のみに見られる実近である。この実近在誰であるかは不明である。

ここに登場する人物はいずれも頼朝の側近であつたと考えられる。では、なぜこの中から盛長が選ばれたのだろうか。前述のように真名本において盛長は頼朝郎從の筆頭格として描かれているので、この格式をもつて郎從側近の中から「夢見」の役割を付されたとも考えられなくもない。だがこの格式という理由のみをもつて、靈夢譚における盛長の役割を結論付けられるであらうか。

福田氏も指摘されるように、この靈夢が史実であるか否かは判然としない。しかしながら少なくとも、当時の物語を享受する側の人達は「現実」として認識していたのではないだろうか。科学が発達した現代人の感覚とは「夢」に対する認識は全く違うものであり、より現実的なもの、現実として起こりうるものという認識であつたように思われる。

盛長は靈夢を見、「咄き御示現を蒙りて」とするので、享受側は伊

豆山権現の御示現であるという確認をする。この場面は、真名本においてのみ頼朝、政子夫妻も夢を見ている。頼朝、政子はそれぞれ「殊勝の霊夢に預かりぬ」、「不思議の御示現に預かりぬ」とする。頼朝は八幡権現の擁護を夢告され、政子は頼朝治世の後の日本国統治を示現されている。政子の夢について物語は、「女性なれども、信力堅固の故に、権現の御利生を立ち処に蒙りけるこそ有難けれ」とする。また、周囲の人々をして「これ程に打話き御祈請の候はんには、権現も争か御納受なかるべき」と語らせている。これより前、物語では頼朝夫妻は伊豆山で精進潔斎し、参籠を行っている。つまりこの霊夢譚は政子の夢の結果について述べる場面に集約されるように、伊豆山権現への信仰を説き、その信仰心が強ければ霊験があらたかであるということ述べ、伊豆山権現を称揚しているのである。

盛長は伊豆山で夢を見、景義が占った。景義の判じた前途の吉兆に頼朝は「誠にこの夢想の如くならば、盛長においては夢の喜び申しあるべく、景義においては夢合せの引出物あるべし」と述べるのである。前述のように、この夢見での盛長への褒賞はおそらく史実とは異なるものであったと思われる。しかしながら物語中における盛長、景義に対するその褒賞は、いわば頼朝が伊豆山権現の示現に対して誓約した褒賞とも、また視点を変えて見たときには、伊豆山権現が約束した褒賞、と解釈することができるのではないだろうか。

福田氏がこの場面で夢占いを行う景義について、作者との緊密な関係を指摘されるように、筆者は夢を見た当人である盛長が、単に頼朝郎従の筆頭格という格式だけで霊夢を見たのではないと考え、ここに

盛長（安達氏）と作者（伊豆山権現に関係する人々）との関係を推測するのである。

残念ながら伊豆山権現と安達氏の関わりを明確に示す史料が見当たらないので、煩瑣な論を延々と述べるに至ったが、筆者は盛長の「夢見」という行為について論考を深める必要があると考えている。

四 山木攻めにおける盛長について

さらに、真名本作者の安達氏への関心の度合を示していると思われるものを挙げる。それは源頼朝拳兵の緒戦となった山木攻めにおける盛長の登場である。

周知のように治承四年（一一八〇）八月十七日、頼朝は平氏追討の兵を挙げるに際し、伊豆国目代の山木兼隆を最初の標的とした。真名本『曾我物語』では頼朝の軍勢として、時政・宗時・義時の北条父子を大將軍とし、次いで藤九郎盛長と定綱・盛綱・成綱・高綱の佐々木四兄弟、そして加藤景門（廉）⁽²²⁾を挙げる。この場面、仮名本『曾我物語』⁽²³⁾、「吾妻鏡」、「延慶本」、「盛衰記」では頼朝の軍勢としての武士が描かれているかを確認する。

① 仮名本『曾我物語』で実際に戦闘行為を行っている武士としては、北条時政父子、佐々木高綱・加藤次景廉、景信（大庭景義）が記されている。（巻第二一二三頁）

② 『吾妻鏡』では北条時政、佐々木定綱・経高・盛綱・高綱の四兄弟、加藤景廉、堀親家があり、他に住吉昌長が祈祷を行うために

加わっている。〈治承四年八月十七日条〉

③『延慶本』では北条時政・宗時・義時父子、佐々木定綱・経高・盛綱・高綱の四兄弟、「已下」と記し、他に加藤景廉が加わる。

〈上頁497〉

④『盛衰記』では大将を北条時政、先駆けを宗時とし、義時、佐々木四兄弟、土肥、土屋、岡崎、佐奈田與一、懷島平権頭(大庭景義)が名を連ね、ここでも後から加藤景廉が加わる。〈巻第二十「八牧夜討」〉

このように諸本ともに山木攻めの武士の主力として、北条父子、佐々木兄弟、加藤景廉が固定され、他の武士に若干の異同が見られる。しかしながら上記の諸本の内、いずれにも盛長の名は見られない。つまり盛長は真名本においてのみ山木攻めに参加しているのであり、盛長を記していることは真名本の独自性を持った記事と言える。

しかしながら実際には、仮名本『曾我物語』、『吾妻鏡』、『延慶本』、『盛衰記』の各諸本で山木攻めに盛長の名が見えないことから、盛長は戦闘自体には加わらずにいた可能性が高いように思われる。

そもそも盛長にはあまり、「武人」としての活動は見られない。この山木攻めの日も、『吾妻鏡』同日条によれば三島社へ奉幣の使者として向かっているが、前述したように真名本以外での合戦参加は見られない。後日の石橋山の合戦でも頼朝麾下として名前は見えないものの、戦闘行為は見られない。また、『吾妻鏡』治承四年八月四日条で、盛長と「因縁」があるとされる「洛陽放遊の士」藤原邦通を頼朝に引き合わせている。邦通はいわゆる京下りの「文吏」とされており、これ

と交遊があったとされる盛長もまた「文吏」の面を持ち、それは「武人」の面よりも強かったのではないだろうか。このことは注(7)で見たように、盛長が各武士団へ使者として赴いている点からも推測できる。

山木攻めは頼朝挙兵の緒戦であることから、『吾妻鏡』においてここに参戦していた武士として名前を記されることは、頼朝麾下の最古参を意味する重要な事であったと考えられる。したがって、戦闘自体には加わらなかつたであろう盛長を、作者は常に頼朝側近の筆頭として描く真名本の立場から、山木攻めの武士の中に加えたのではないだろうか。この記事が真名本独自の記事であることは、作者が安達氏の鎌倉幕府草創期からの有力御家人としての立場について、一定の認識を持っていた証左と見ることができ、作者の安達氏への特別の認識、言い換えれば顕彰を目的としたものとも考えられるのである。

おわりに

以上、真名本『曾我物語』と安達氏との関係性について検討してきた。鎌倉幕府御家人としての安達氏が北条氏の姻戚として、霜月騒動後の一時期を除いて勢威を誇ったのは改めて言うまでもない。これにより、真名本の成立時期を鎌倉末期に想定するならば、安達氏に対する顕彰記事があつても不自然ではないのである。

真名本における藤九郎盛長はその記載のほとんどを「頼朝説話」に依拠する。したがって、この部分の盛長像を真名本独自のものとする

ことはいささか困難であるとも言える。しかしながら、仮に真名作者がすでに存在していた「頼朝説話」の世界をそのまま取り入れていたとしても、盛長をその記述の如くに頼朝の郎從筆頭と認識していたことは、真名本編纂時にはその状況に特別な矛盾を感じることもなかったためと推察される。

そして、「夢の引出物」に見られる盛長の記述はやはり特異なものであると言えよう。恩賞として与えられた「上野国惣追捕使補任」の史実性は判じがたいが、本来は子息景盛の代からの名乗りである「秋田城介」、「城氏」を盛長の代からのものとし、恩賞の後、唯一登場する富士野の場面においてもこの「城介」を使用するのである。これは真名本作者が史実よりも、「現在」の安達氏の置かれる状況に重きをおいた結果であると思われる。

このことを別の視点で見た場合、真名本作者には「現在」の安達氏の環境というものは、すでに盛長の時代からのものである、ということとを主張する目的があったと思われる。ここには盛長を流人時代からの頼朝郎從筆頭と描くこと、武門の名譽であるとされる「秋田城介」⁽²⁶⁾を盛長の代からと記すことによって、安達氏への顕彰をはかったのではないだろうか。

さて、便宜上筆者は冒頭から安達氏に対して「安達」の姓を使用してきたが、真名本の中に「安達」の表記はない。抄録でも述べたが、真名本作者は「安達」の姓の表記を用いていないのである。これは安達氏が幕府草創期の「安達氏」ではなく、「秋田城介」に任官した「城氏」であることを意識し、強調しているものと思われ、ここに真

名本『曾我物語』の作者の安達氏に対する特別な関心がうかがえるのである。⁽²⁶⁾

〔注〕

- (1) この成立年代は現存の真名本ではない。山西明氏は「曾我物語」の成立（村上美登志氏編集『曾我物語の作品宇宙』 至文堂 二〇〇三）で「現存真字本の母胎となる原・真字本を想定して」「鎌倉時代末期に収束しつつある」とされる。現存の真名本の成立年代に関して村上学氏は十四世紀後半から十五世紀初頭を目安とされている（『曾我物語の基礎的研究』 風間書房 一九八三）。

- (2) 『曾我物語』（解説和田琢磨 勉誠出版社 二〇〇五）。

- (3) 『曾我物語生成論』（笠間書院 二〇〇一）。

- (4) 『曾我物語の成立』（三弥井書店 二〇〇二）。

- (5) 『東洋文庫 真名本曾我物語』（平凡社 一九八七）。以下本文中の引用はこれに依り、必要に応じて頁数を付した。

- (6) 『源平闘諍録』にも同内容の記事が見られる。

然る間、頼朝思はれるは、「我当国に流罪せられて、田舎の塵に交はるといへども、此の子を設けたることは悦びなり」とて、千鶴となづけられたり。頼朝言ひけるは、「此の子十五に成らん時、伊東・北条を相ひ具して先陣に打たせ、定綱・盛長を指し廻らし、東国の勢を招き、頼朝都に馳せ上つて、父の敵清盛を打たん」と言ひながら、二所権現・三嶋明神の御宝殿に秘に願書をぞ納められける。

〔引用は福田豊彦・服部幸造『源平闘諍録』（講談社一九九九）。以下

本文中の引用はこれに依り、必要に応じて頁数を付した。」

ここでは定綱、盛長の順序となっているが、盛長が伊東、北条の次位と認識される対象であることに変わりはないと言える。

- (7) 真名本には、頼朝拳兵時における各武士団への勧誘使者についての記事は無い。したがって盛長の活動も見られないが、『吾妻鏡』、『延慶本平家物語』、『源平盛衰記』には各武士団への使者としての盛長の活動が見られる。

- ① 『吾妻鏡』 (石橋山合戦前) 波多野氏、山内首藤氏 (石橋山合戦後) 千葉氏

- ② 『延慶本平家物語』 (石橋山合戦前) 波多野氏、上総氏、千葉氏、山内首藤氏、三浦氏

- ③ 『源平盛衰記』 (石橋山合戦前) 波多野氏、大庭氏 (景義)、山内首藤氏、三浦氏、千葉氏、上総氏

以上のように諸本で細かな部分に異同が見られるものの、諸本共に波多野氏、山内首藤氏、千葉氏に関しては盛長が使者として赴いたとされるのである。

- (8) 治承四年(一一八〇)の以仁王の令旨から記述が始まる『吾妻鏡』は、これ以前の頼朝の動向をほとんど記さないため、盛長の動向もまた不明である。しかしながら、頼朝拳兵時に各武士団のもとへ使者として赴いたり、幕府開設の後頼朝が御行始にしばしば盛長邸に赴く、建久二年(一一九二)三月の鎌倉の大火事では、焼失した館の再建まで頼朝が盛長の屋敷に逗留するなど、頼朝に信頼されていたようである。ここには流人時代からの主従関係という、特別な意識が頼朝と盛長の間にはあったことが推測される。

また文治五年(一一八九)六月二十九日条には治承三年(一一七九)三月二日に、頼朝が伊豆から武蔵慈光山に盛長を使者として遣わした記

述があるので、頼朝の側にいたことが確認できる。

- (9) 『延慶本平家物語 本文篇上・下』(勉誠社 一九九〇)、『源平盛衰記』(三弥井書店 一九九四)、『源平闘諍録』は注(6)参照。

- (10) 真名本『曾我物語』と『源平闘諍録』に見られる『頼朝説話』の関係については、山下宏明氏「源平闘諍録管見―其の成立基盤をめぐって―」(『国語と国文学』一九六一・八)、福田晃氏「頼朝伊豆流離説話の生成―平家物語・曾我物語より―」(『国語と国文学』一九六六・六)に詳しい。両氏のご指摘によれば、『闘諍録』の『頼朝説話』は真名本『曾我物語』の『頼朝説話』よりも古態を有しているとされる。

- (11) しかしながら、山西氏は盛長の描かれ方について『源平闘諍録』・『延慶本平家物語』を対象に比較を行い、その記述方法に関しては詳細な部分に、真名本の語り手の盛長に対する微妙な関心の反映が見られると指摘されている。山西氏前掲書。注(3)参照。

- (12) この盛長の霊夢譚は『延慶本平家物語』・『源平盛衰記』・『源平闘諍録』にも見られるが、このうち後日譚を記すのは『源平闘諍録』のみである。

- (13) 『増訂鎌倉幕府守護制度の研究』(東京大学出版会 一九七二)。

- (14) 『頼朝拳兵時代の守護人成敗』(『歴史学研究』四六九号、一九七九)。

- (15) 『守護』

『守護』

- ① 卷八 相州の守護和田左衛門義盛
② 卷五 国々に守護人を置きつつ

- ③ 卷八 相州の守護人和田左衛門義盛

- ④ 卷八 武州の守護人畠山次郎重忠

- ⑤ 卷八 武州の守護人畠山次郎重忠

『惣追捕使』

- ⑥ 卷四 〈安達盛長を〉上野の国の惣追捕使になして

- ⑦ 卷五 〈畠山重忠を〉武蔵・上野両国の惣追捕使にぞなされける

⑧ 卷九 馬屋の下部の惣追捕使の国光

右のうち、明らかに「守護職」を意味するものは②である。次に①③④⑤であるが、一見すると「守護職」を意味するものと思われるが、義盛の相模守護職・重忠の武蔵守護職は管見の限りでは史料上で確認できない。⑥に関しては本論でも述べたが、「守護職」を意味するかは判然としない。⑦は④⑤同様に重忠に関するこのような史料は確認できない。また、⑥と⑦には二人が上野の惣追捕使に任じられたという矛盾があることを指摘しておきたい。⑧は「統括」的な意と思われる。

(16) 『新訂増補国史大系 尊卑分脈第二編』(吉川弘文館)。

(17) 以下、引用は『新訂増補国史大系 吾妻鏡』(吉川弘文館)に依る。

(18) 御家人制研究会編 『吾妻鏡人名索引』(吉川弘文館 一九七二)。

(19) 『東洋文庫 真名本曾我物語2』。157頁、及び172頁の図参照。

(20) 福田氏前掲論文。注(10) 参照。

(21) 無論、真名本『曾我物語』の作者を伊豆山僧侶に限定するものではない。

伊豆山僧侶も物語の生成・管理に関わった一員と捉えるものである。

(22) 『東洋文庫 真名本曾我物語1』。164頁参照。

(23) 『日本古典文学大系88 曾我物語』(岩波書店 一九六六)。

(24) 『吾妻鏡』では山木攻めの記述の中に、頼朝の言として「事の草創」、また佐々木経高が放った矢を、「源家が平氏を征する最前の一箭」等の表現を用いていることから、編纂者が頼朝挙兵の緒戦である山木攻めを意識していた事がわかる。

真名本『曾我物語』でも盛長の霊夢譚の場面で「鎌倉殿世を取らせ給ひつつ日本国を持ちて十九年なり。廿年と申す正治元年逝去ありしかば、」とするので、作者が治承四年の挙兵、すなわち緒戦の山木攻めが頼朝政権の草創と認識していたと言える。『東洋文庫 真名本曾我物語1』。189頁、注43参照。

(25) 『吾妻鏡』には景盛の任官時に「景盛恐悦顔色に彰はる。」と記述され、

また、『信長公記』の天正三年(一五七五)に織田菅九郎(信忠)の秋田城介任官の記述があるが、ここでは「御冥加の至りなり。」とされている。

(26) 真名本『曾我物語』において盛長・景盛ともに「安達」の表記は見られない。なぜ真名本作者が「安達」姓を使用しなかったかは不明であるが、このことは作者と安達氏の関係性を考察する上で、重要な問題点であると思われる。よって今後の課題としたい。

(やまにし やすお 文学研究科日本史学専攻博士後期課程)

(指導…今堀 太逸 教授)

二〇〇七年十月十一日受理

